

ヴィクトル・ユゴーの詩におけるボナパルチスム

—十九世紀ナヨシナリズムと文学—

西 川 長 夫

(一) ユゴーにおけるボナパルチスムの形成 1

ヴィクトル・ユゴーは生涯を通じてナポレオンに深い関心を示した。ユゴーはナポレオン伝説のもっとも有力な提供者であったが、彼じしんもまたその伝説の熱狂的な雰囲気の中で陶酔していたのであった。ユゴーもまた「ナポレオンの大いなる影」からのがれることができなかったのだ。

ユゴーにおけるボナパルチスムの問題とは、さしあたり例えばつぎのような詩句をどのように受けとめ解釈するかということである。

Histoire, poésie, il joint du pied vos cimes.

Eperdu, je ne puis dans ces mondes sublimes

Remuer rien de grand sans toucher à son nom ;

Oui, quand tu m'apparais, pour le culte ou le blâme
Les chants violent pressés sur mes lèvres de flamme,
Napoléon! soleil dont je suis le Mémoré!

(ナポレオンは歴史とボエジの二つの頂を足でふまえて結びつける。夢中になって私がこの崇高な二つの世界でなにか偉大なものをつくりだそうとするとかならず彼の名にふれてしまう。そうだ、崇拜するにしろ非難するにしろ、あなたが私の前にあらわれると、私の炎の唇には数々の歌がひしめいてとびだしてくる。ナポレオンよ、私がそのメムノンの像である太陽よ。)(「彼」一八二八年十二月)

ユゴーにおけるボナパルチスムはユゴーの両親の問題をぬきにしては考えられない。それは単なる親と子の関係ではない。ユゴーの内的なドラマをかたちづくる、二つの対立するシンボルであり、思想と感情と気質の葛藤の問題となつてあらわれてくるからである。

レオポルド・シジスベール・ユゴーは共和国の勇敢な士官として一七九三年に反乱軍征討のためにヴァンデに派遣され、その地で「国民公会の専制を憎む熱烈なヴァンデの反徒」ソフィー・トレビッシュに出会った。結婚して子供ができたものの、陽気で道楽者の典型的な共和政府軍の大尉と、ストイックで強情な王党派の女との間にはうまくゆかなかった。

レオポルド・ユゴーはやがて將軍となりジョゼフ王の下でスベインの爵位を与えられるまでになるが、あいかわらず情婦をつれて歩きまわっていた。ソフィー・トレビッシュの方は、幼な友達で、反ナポレオンの言行で目立っていたモロー將軍の第一の腹心であったラオリーと関係していた。ヴィクトル・ユゴーが反ナポレオンの王党派として出発したのは、それが王政復古の時代であることは、べつとして、別居していた母親の強い影響下に育ったからである。一時ラオリーはユゴーの家に身をよせて少年ユゴーにかなり影響を与えた。やがてソフィーはマレー將軍事件〔ナポレオンがロシア遠征でパリを留守にしているあいだに、皇帝逝去の虚報をばらまいて政府顛覆をはかった事件〕に連座して処刑されたラオリーの遺骸につきそって共同墓地までゆくことになる。

ヴィクトル・ユゴーがボナパルチストとしての心情を明確にうたいあげるにいたるのは、一八二七年であるが、それまでには母親の死（二十一年六月二十七日）、ユゴーの結婚（二十二年十月十二日）およびそれをきっかけにしたユゴー將軍との接近といった事件が必要であった。

一八二二年のノートに「ブオナバルテは偉大な俳優だが退け際を

あやまった。（…）五月五日ブオナバルテの死」（一〇八七頁）と書かれているところを見ると、このときユゴーは王党派の心情を守っていたと考えられる。二二年六月の処女詩集『オードと雑詠』は、スタンダールをして、巧みな詩だが厭気をもよおす、世間では王党派の詩人はラルチヌだと考えているが、真の王党派詩人はユゴーであると書評に記させた（「イギリス通信」第一卷七三頁）ほどのものであった。だが二二年三月の「ブオナバルテ」になると、たとえ悪魔的に描かれてはいても英雄にたいする共感がよみとれなくはない。そして「わが父に」（二三年八月）〔二形広場の凱旋門〕（二三年十一月）にはボナパルチストの心情の最初の表出がみられる。

O Français! des combats la palme vous décore ;
Coubés sous un tyran, vous étiez grands encore.
Ce chef prodigieux par vous s'est élevé ;
Son immortalité sur vos gloires se fonde,
Et rien n'effacera des annales du monde
Son nom, par vos glaives gravé.

（フランスの兵士たちよ、勝利の棕櫚の枝は君たちを飾る、専制君主に服しながらも君たちは偉大だったのだから、あの非凡な元首は君たちのおかげで高位につき、彼の不滅の名声も君たちの武勲の上にきづかれ、君たちの剣によって刻まれた彼の名は何ものによって、もけつして世界の歴史から消えないだろう。）（「わが父に」）

「シャルル十世の聖別式」（一八二五）の詩人となることをさま

たげない程度ではあるが、一八二二年から二三年にかけての間に、ブオナバルテからナポレオンへのひそかな転換がおこなわれたと考えることができる。一方ナポレオンの死によってナポレオン伝説の上には大きな変化がおこりつつあった。反英感情がたかまり、三十年後にユゴーが悔恨と愛惜の情をもって「人々はもはや輝かしい日々しか思い出さない」という情況が生れていた。

一八二七年は、後にユゴーが一八二七年以前に書いた言ったりしたことはすべて否定する、責任がもてないと言ったほどに決定的な年となった。前の年に出了た『オードとバラッド』にたいする好意的な批評を『グローブ』紙にかいてサント・ブーヴが近づいてきた。「クロムウエル」の序文によってロマン主義の理論的指導者とみなされるようになった。そしてユゴーは「ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード」を書いた。これら一連の出来事は内的なつながりをもっている。十六才の日記にシャトープリヤンになりたい、それ以外はごめんだと書いたユゴーは、この年になってシャトープリヤンの王党派ロマン主義から「グローブ」を中心とする自由主義的ロマン主義に移っていく。「一八二七年には私はもはや王党ではなかった」とユゴーが書くとき、それは単なる政治的見解の変更ではなく、ユゴーのポエジーの世界における革命を意味していた。

一八二七年一月三〇日、オーストリア大使館で新任大使アポニー伯による舞踏会が催され、数人の帝政時代の元師が招待された。ところが「レッジョ公」と名のると、「ウディーノ元師」と取りつがれる。「ダルマチャ公」は「スールト元師」……ということがあつ

て元師たちは憤慨して帰ってしまった。このスキャンダルはパリ中にひろがり、翌日には議会にもちこまれた。ユゴーの詩は二月九日付の「デバ」紙に発表された。ひとりの受付係のいやがらせとみればごく些細な事件であるが、フランスのうつ屈した国民感情はこれを機に爆発したのである。

Prenez garde! — la France, où grandit un autre âge,

N'est pas si morte encor qu'elle souffre un outrage!

Les partis pour un temps voileront leur tableau.

Contre une injure, ici, tout s'unit, tout se lève,

Tout s'arme, et la Vendée aiguisera son glaive

Sur la pierre de Waterloo. ...

Que l'Autriche en rampt de noeuds environne,

Les deux géants de France ont foulé sa couronne!

L'histoire, qui des temps ouvre le panthéon,

Montre empreints aux deux fronts du vautour d'Allemagne

La sandale de Charlemagne,

L'épéron de Napoléon.

(気をつけるがよい。新しい世代が成長しているフランスは屈辱にあまんじるほど衰えてはいないのだ。様々な党派もしばらくの間は黨員名簿におおいをかけるだろう。この侮辱に対していまやすべての国民が団結し、立ちあがり、武器をとり、ヴァンデはその剣をワールローの砥石にかけてとぐであらう。

オーストリアが卑しい行為によってフランス国民をしばりつける

ならそうするがよい。フランスの二人の巨人はすでにオーストリアの王冠を踏みにじっている。様々な時代のパンテオンの戸口を開く歴史は、ドイツのはげたかの双頭に残された、シャルルマーニュの軍靴とナポレオンの拍車のあとを示している。……)

いざどおりが身に伝わってくる激しい詩である。オーストリアやイギリスという単語のほかに外国人(étrangers)という語がぐりかえし(七回)出てくる。これはナショナリズムというよりはほとんどシヨーヴィニズムといってよいほどのものである。妻のアデル・ユゴーの書いた伝記には「記念柱によせるオード」の章がとってあつて次のような記述がある。

「……ヴィクトル・ユゴーの血管の中にあつた兵士の血が顔にのぼつてきた。彼には父親が侮辱されたように思えたのだ。彼は復讐のおさえがたい欲求を感じた。彼は△記念柱によせるオード▽を書いた。このオードはデバ紙の第一面に直ちに発表され、多くの新聞にもくりかえしのせられて大きな反響をまきおこした。そのときまではこの王党派の詩人に敵意を示していた反対派の新聞も今度は詩人をほめそやした。そのかわり政府の新聞がほめなくなった。オーストリアを攻撃することはオーストリアがフランスにつれもどしたブルボン家を攻撃することであり、元師たちに榮譽を与えることは、帝国に榮譽を与えることであつたのだ。このオードは純粹王党派から見ればかれらの陣営からの脱走と思えた。

この事件が仲違いのはじまりとなつた。(……) ユゴーが受入れたのは、こんどは△かれの父にあてた▽オードのように軍隊だけに

かざられてはいなかった。皇帝もまたうけ入れたのだ。△ブオナバルテ▽は△ナポレオン▽になつた。△暴君▽は忘れられ△ナポレオンの拍車▽は△シャルルマーニュの軍靴▽と同じ価値をもつことになつた。……」(一六一頁)

E・ビレが指摘しているように、アデルの証言は正確さを欠いている。オードは直ちに発表されたのではなく事件の十日後、それも第一面でなく三面から四面にかけてであつた。また侮辱をうけた元師たちにしても王に忠誠を誓つた元師であり、オードの詩句にも「アンリ四世の不滅の銅像」、「ブルボン家」、「白旗」、「王旗と百合花」といった言葉が適当にちりばめてあつて、反王党派の立場が明確に表明されているとはいひがたい。(一八二九年ユゴーはシャルル十世にあらためて忠誠を表明したという事実がある。)だがそれにもかかわらずアデルの証言は、当時の雰囲気と事件の本質を伝えている。重要なのは「革命と帝国とは、彼の幻想的なひとみの前に光をはなつ遠景となつた。」(「レ・ミゼラブル」第三部)というユゴーの内面的変化であつた。この後は帝国と皇帝はユゴーのポエジーのもつとも豊かな源泉となるのである。

ユゴーは△母親▽の支配から脱したのだ。ユゴー自身のちに「私は一八二七年に大人の年令 *Age d'homme* にたつした」と書いている。ユゴー將軍はといえば「時の流れにまかせよう。子供は母親の意見にしたがうが、大人になれば父親の意見に組するだろう。」(「その生涯に立会つた人によつて語られたヴィクトル・ユゴー」第三十二章) という名言を残していた。將軍の死は翌二八年である。

『オードとバラッド』につぐユゴーの『東方詩集』（一八二九）は、そこにうたわれたボナパルチズムの心情（「ブナベルディ」「彼」など）と、ギリシャ独立戦争によせる共感とによって王党派の人々の頭をしめさせた。ロマン派のアウステルリッツと呼ばれた「エルナニ」（一八三〇）は、チボーデによれば、ロマン派演劇のワitelローとなった。^{レ・ユグロ}「城主たち」とならんで皇帝崇拜劇であった。

このような時期にユゴーは自己の生涯をふりかえって「今世紀は二才であった」（一八三〇年六月二三日）を書きのこしている。それは一八〇二年に生れたユゴーの自己形成を歴史的体験と民族的な感情のなかで理解しようとする、一種の自伝詩であり、ユゴーが詩人としての自己を確立したことを物語るような詩である。この詩集『秋の木の葉』の冒頭をかざる詩は

Ce siècle avait deux ans! Rome remplaçait Sparte,
Déjà Napoléon perçait sous Bonaparte, ...

（今世紀は二才であった。ローマがスパルタに代わろうとしていた。すでにボナパルトの下にナポレオンが姿をみせていた……）

ではじまり

Naquit d'un sang breton et lorrain à la fois ...

（ブルターニュとロレーヌの血をうけて……）

という詩句や un écho sonore（ひびきわたることだ）という言葉で有名であるが、ここではそれが次のような結論でおわっていることを指摘するにとどめたい。

Après avoir chanté, j'écoute et je contemple,
A l'empereur tombé dressant dans l'ombre un temple,
Aimant la liberté pour ses fruits, pour ses fleurs,
Le trône pour son droit, le roi pour ses malheures ;
Fidèle enfin au sang qu'ont versé dans ma veine
Mon père vieux soldat, ma mère vendéen!

（うたいおわると私は耳をすまして思いにふける。倒れた皇帝のためにはひそかに御堂をたて、自由をその花と実のゆえに愛し、王権をその正当な権利ゆえに王をその不幸ゆえに愛する。革命時代の兵士であった父とヴァンデの女であった母が私の血脈につたえた血に忠実に。）

これは一つの段階に達したユゴーの《父》と《母》の要約である。この詩が提供するユゴーの思想上の《転向》と詩学との関係についてはこの小論の最後の章でもう一度ふりかえってみよう。

(二) ユゴーにおけるボナパルチズムの形成 2

ユゴーのボナパルチズムはボエジの世界にとどまることなく、一八三一年九月にはジョゼフ王に書翰をおくって、ライヒシュタット公（ナポレオン二世）に仕える用意のあることを告げている。だがナポレオン二世は翌年の七月二日にウインで死ぬ。そして一八三五年に出た詩集『たそがれの歌』には「*教会にて」といったジュリエットをうたった抒情詩とならんで、第二の「ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード」（一八三〇年十月九日）、「ナポレ

オン二世」(一八三二年八月)、「戦に敗れた偉人」一八三五年二月二十一日といったボナパルチズムの詩がおさめられた。

「記念柱によせる第二のオード」と呼ばれている詩は、第一のオードとは同じ主題をうたっているのであるが、第一のオードにみられた憤激に身をふるわせ、こぶしを振上げて絶叫するような調子がおさえられ内面化されて、父親の墓前で語りかけるようなしみじみとした情緒をともなっている。これは「ナポレオン二世」についていえることである。たとえば、

Oui, l'aigle, un soir, planait aux voûtes éternelles,

Lorsqu'un grand coup de vent lui cassa les deux ailes;

Sa chute fit dans l'air un foudroyant sillon;

Tous alors sur son nid fondirent pleins de joie;

Chacun selon ses dents se partagea la proie;

L'Angleterre prit l'aigle, et l'Autriche l'aiglon!

(そうだ、鷲が無限の天空を飛翔していたある夕ぐれに一陣の強い風がその両翼を折ったのだ。その失墜は大空に稲妻のような跡をのこした。そのときみんなは大喜びで鷲の巣に殺到して、それぞれその齒の強さに応じて獲物を分けあった。イギリスは親鷲をオーストリアは子鷲を。)

のような詩句によって第一のオードのような反イギリス、反オーストリア感情を表明してはいるが、主題はむしろ、英雄の書き残した壮大な叙事詩世界と英雄が一人の金髪の幼児によせる愛情とを対

照的に描き、それを次のような詩句にみちびくことであった。

...Hommes et choses, pêle-mêle,

Vont roulant dans l'abîme obscur;

Tout dérive et s'en va sous l'onde,

Rois au berceau, maître du monde,...

(人も物も混り合い、暗い淵の中をたえず転々と流れ去る。揺籃の王子も世界を支配する王も、すべてが遠ざかり波の下に消え去る。……)

人間も物質も、英雄もいとけない幼児も、すべてをのみこんで無限に流れ去る暗い時間の感覚は、(主題をブリュヌチエールの云うような愛と死と自然にとって抒情となるか、歴史にとって叙事詩となるかは別として) ユゴーの詩的世界の内奥のリズムの源である。

一八四〇年、現実がユゴーをふたたび熱狂のなかに投げ入れた。ナポレオンの遺骸が死後二〇年をへて祖国の土にかえされたのである。一八四〇年十二月十五日ユゴーは刻明なノート(Notes prises sur place)をとっている。薄曇の空からときたま日が射してくることはあったが、溝に水が張るような寒い日であった。思い出したように雪が降った。葬儀は盛大なものであったが、生き残った将軍たちは見るかげもなく老いさらばえていた。政府は民衆の動きをおそれ帝国の偉大な思い出をおおいかくすことに努めていた。「皇帝の靈柩車があらわれた。このとき霧におおわれていた空がはれて太陽が輝いた。」そして街頭では民衆が「皇帝バンザイ/われらのナ

ボレオン、バンザイ！」と叫んでいる一方、「陛下、ナポレオン皇帝の遺骸を御引渡しいたします。」「私はフランスの名において受取る。」「と、いったやうとりがアン・バリッラの内部でかわされていた。エコーは「皇帝の帰還」と題する長い熱狂的な詩を書いた。

Sire, vous reviendrez dans votre capitale,

Sans tocsin, sans combat, sans lutte et sans fureur,

Trainé par huit chevaux sous l'arche triomphale,

En habit d'empereur!

par cette même porte, où Dieu vous accompagne,

Sire, vous reviendrez sur un sublime char,

Glorieux, couronné, saint comme Charlemagne

Et grand comme César!...

Paris sur ses cent tours allumera des phares ;

Paris fera parler toutes ses grandes voix ;

Les cloches, les tambours, les clairons, les fanfares,

Chanteront à la fois.

Les poètes divins, élite agenouillée,

Vous proclameront grand, vénérable, immortel,

Et de votre mémoire, injustement souillée.

Redoreront l'autel.

(陛下、あなたもあなたの首都で帰るになる。早鐘もな、戦闘もな、争いも熱狂もな、入頭だつての車、凱旋門のそば、皇帝の服装をして、)

神があなたを連れ出したあの同じ門を通過して、陛下、あなたは崇高な車にのってお帰になる。榮譽と王冠にかざられシャルルマーニュのような聖者として、シーザーのような偉人として、(……)パリは幾百の塔に燈火をかかげ大声をはりあげて語るだらう。鐘の音が、太鼓が、ラッパが、軍楽隊がともにうたうだらう。(……)神の詩人たちは選ばれてひざまずいたあなたを偉人とも尊敬すべきにも不滅とも呼び、不当にも汚されたあなたの思出の祭壇をふたたび金色に染めるであらう。)

この詩は広く知られ、ヘンリッ伯のバロディも有名になったほどである。一八二二年に王党の代表詩人であったエコーは、《今は亡き帝国》のいまや自他ともに許す代表詩人であった。一八四〇年はエコーの年だ。なぜなら十年前に次のような美しい言葉を書いてこの十二月十五日を約束したのははかならぬエコーなのだから。

Dors, nous t'irons chercher! ce jour viendra peut-être!

Car nous t'avons pour dieu sans t'avoir eu pour maître!

Car notre œil s'est mouillé de ton destin fatal,

Et sous les trois couleurs comme sous l'oriflamme,

Nous ne nous pas à cette corde infâme

Qui t'arrache à ton piédestal!

Oh! va, nous te ferons de belles funérailles!

Nous aurons bien aussi peut-être nos batailles ;

Nous en ombragerons ton cercueil respecté ;

Nous y convivons tout, Europe, Afrique, Asie!
Et nous t'amènerons la jeune poésie

Chantant la jeune liberté...

(眠れ、私たちはあなたの亡骸を求めに行く。その日はおそらくや
って来るだろう。じっさい私たちはあなたを支配者としてあおがな
かったが神としてあおいであり、あなたの不幸な運命に私たちの目
は濡れたのだ。王旗の下でも三色旗の下でも私たちはあなたを台座
から引き降すあの恥すべき綱を引きはしない)

ああそうだと、あなたの葬いは立派にしてやろう。私たちはま
たおそらく私たちの戦さを持ち、それによってあなたの尊い柩に蔭
をつくろう。私たちはその葬いの場にヨーロッパやアフリカやアジ
アを招こう。そして私たちはあなたのために若々しい自由をうたう
若々しいポエジーをあなたのために連れていこう! (「ヴァン
ドーム広場の記念柱によせるオード」)

ユゴーがこの年の暮に、これまで書いてきた数多くのボナパルチ
スムの詩から選んで一冊の詩集を出版したのは、単なる商売上の理
由からではなく『帝国の詩人』としての立場の表明であった。現在
この詩集を手元に見ることができないのでビレの証言[E. Biré:
Victor Hugo après 1830]から推定すると、次の十篇が収められ
ていたと思われる。

「皇帝の帰還」(一八四〇年十二月『諸世紀の伝説』)

「彼」(一八二八年十二月『東方詩集』)

「ブナベルディ」(一八二八年十一月『東方詩集』)

「ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード」(一八二七年『オ
ードとバラッド』)

「パンテオンの皇帝」(「子供のころの思出」一八三〇年十一月
『秋の木の葉』……のことか?)

「ヴァンドーム広場の記念柱によせるオード」(一八三〇年十月
九日『たそがれの歌』)

「戦に敗れた偉人」(一八三五年二月二日『たそがれの歌』)

「ナポレオン二世」(一八三二年『たそがれの歌』)

「公爵夫人ロールに」(一八四〇年二月『光と影』)

「円形広場の凱旋門によせる」(一八二三年『オードとバラッド』
にあるものではなく同名の一八三七年二月二日『内心の声』か?)

〔以上〕

これがユゴーのボナパルチスム詩の全部でないことは言うまでも
ないが、芸術的にみても水準の高い詩集である。詩集の出版と時を
同じくして「デバ」紙(一八四〇年十二月二四日)に次のような記
事が出た(同じくビレによる)。広告にしては本質をついた文章で
ある。

「十二年來、ヴィクトル・ユゴーは国民の思想(pensée natio-
nale)のあらゆる動きに密接に結びついてきた。そこからさまざま
な機会に次のような永続ししかも深い反響を与えた詩がうまれた。
記念柱によせるオードは帝国の元師たちのためにオーストリアの侮
辱に復讐したものだ。第二のオードは一八三〇年にすでに、一八四
〇年に実現された記念すべき事件と予言している。「エトワルのア
ーチ」によせる讃歌、「ナポレオン二世」にかんするオード、「彼」

と題された有名な『東方詩集』の一篇、その他の作品が集められてきわめて民衆的できわめてフランス的なインスピレーション、皇帝にたいする偉大な詩人の敬意、一種のナポレオン叙事詩を形成している。

今日、出版されるのはヴィクトル・ユゴー氏の最近作である「皇帝の帰還」を冒頭に配したこのような種類の叙事詩である。……ユゴーがいかなる意味において民衆詩人であつたか示すよき資料であらう。

ユゴーのボナバルチズムの激しさは人を驚かせるほどのものになる。一八四一年、念願のアカデミー入りを果たしたユゴーは、その演説を次の言葉ではじめた。「諸君、今世紀のはじめフランスは諸国民を前にして一つの雄大な光景を示しました。当時、一人の男がフランスを支配しフランスを偉大にした結果、フランスはヨーロッパを支配したのです……」(一九頁)

こうしてナポレオン讃歌が二十分も続き、それからようやく国民公会や王政やオルレアン家やアカデミーにもれなく讃辭をささげたのち先任者のルメルシエに形ばかりのほめ言葉を送つたのであつた。一八四三年の「城主」の失敗、娘レオポルディーヌの死、そして詩人は詩的空白時代といわれる政治家の時代をむかえることになる。(ロマン派演劇のワテルローが幕をとじた夜、チュイルリー宮の前を通りかかったユゴーがフランス座の支配人ビュロに「もしナポレオンがまだ生きていてこの宮殿にいたら、いまのフランスで偉大なものは『城主』だけだと認めてくれ、皇帝もきつと舞台稽古を見にきてくれるだろう」と語つたというエピソードをモロワは記

している。)

オランビオのイメーシがユゴーの内面に育つと平行して、ナポレオンの世界もひろがっていったのであつた。そしてナポレオンの観念はいつのまにか現実世界に物質のかたちをとりはじめていた。

一八四七年六月四日、ユゴーはジェローム・ナポレオン・ボナバルトの家族がフランスに帰る許可を求める嘆願書を支持する演説を貴族院でおこない、それを次のような言葉で結んだ。「諸君、ナポレオンの罪、それは宗教を再興したこと、民法典を制定したこと、フランスをその自然の国境をこえて拡張したこと。それはマレンゴー、イエナ、ワグラム、オーステルリッツであります。それは偉大な一人の人間が偉大な一つの国家にもたらしたものと豪華な権力と栄光の贈物であつたのです」

貴族院の諸君、この偉人の弟がいま諸君に嘆願しているのであります。今日、懇願しているのは一人の老人かつての王である。彼に祖国の土地をかえしてやつて下さい。ジェローム・ナポレオンはその生涯の半ばをただ一つフランスのために死ぬという願望だけを抱いていた。残りの生涯を、かれはただ一つフランスで死ぬことだけを考えていた。諸君はこのような願を拒まないでいただきたい。」この日の日記にユゴーは、かつてナポレオンの大隊長であつた衛士が演壇の下で涙を流していたと記している。

二月革命は当時のフランスを代表する二人の大詩人に政治の主導権をゆだねるかにみえた。オルレアン公妃の摂政に執着したユゴーは、いち早く共和制支持にふみきつたラマルチヌにおくれをとつた。四月二三日の選挙で落選したユゴーが、五月の補欠選挙で保

守派の支持をえて当選したとき、ルイ・ナポレオンもおなじく議会入りをはたしたのであった。八月一日「無政府主義に対するはげしい憎しみ、民衆にたいする優しく深い愛情」をモットーにしたユゴー派の新聞「エヴエヌマン」発刊。十月ルイ・ナポレオンのユゴー訪問。十月二十八日「エヴエヌマン」突如、熱狂的ボナパルチズムに転じ、大統領候補者ルイ・ナポレオン支持を表明。ラマルチヌの一万八千たらずの得票にたいし、ルイ・ナポレオンのそれは五百五十万票であったのは周知の事実である。

△いまは亡きナポレオン帝国△公認の詩人は、今や△現実のナポレオン共和国△の代表的政治家であった。しかし彼は△現実のナポレオン帝国△公認の詩人とはならなかった。断絶は意外に早かったのである。四九年のローマ問題にかんするユゴーの演説を境に二人の関係は冷却していく。十二月二十五日「エヴエヌマン」はユゴーとルイ・ナポレオン絶交の記事。以後、反ルイ・ナポレオンの論調。一八五一年「エヴエヌマン」発行停止命令。「われわれは彼に期待していた。だがこの期待は裏切られたのであります……」という五年二月六日のユゴーの演説。五一年十二月二日（アウステルリッツ戦勝記念日）ルイ・ナポレオンのクーデタ。十一日ユゴーの亡命。五二年一月九日ユゴー追放令。ナポレオン伝説の作者は政治的な責任をとらねばならなかった。

(二) 贖罪—ユゴーにおけるボナパルチズム形成 3

伝説の作者は、伝説がうみだした現実によって手ひどい仕打ちをうけた。亡命生活はユゴーに新しい世界をひらく。『レ・ミゼラブル』と『懲罰』という二つの代表的なボナパルチズム文学が残された。

『懲罰』詩集においてユゴーは、ナポレオン三世とその共犯者たちの卑劣な行為にたいする告発、民衆の苦しみの描写、ユゴー自身の「もし一人だけ残るとしたら、それはこの私だ」(Ultima Verba)という堅い抵抗の決意をのべている。特に目立つのは、詩人が呼びかける対象としての民衆のイメージが鮮明になってきたこと、政治思想としての共和主義が明確になってきたこと、それにもかかわらず依然として「ナポレオンの大いなる影」が全体を支配していること。叙事詩的リズムが獲得されたこと、そして叙事詩と抒情詩と諷刺詩の渾然とした広大な詩的世界がひらけていることなどである。

『懲罰』のなかから「贖罪」一篇をとりだして新しくひらけた詩的世界の検討をこころみよう。この一篇にボナパルチスト・ユゴーの屈辱と復讐、嘲笑と憤激、悔恨と希望……ありとあらゆる感情がこめられているからである。『レ・ミゼラブル』がフランス・ブルジョワジーの青春の記念碑であるとすれば、この詩はブルジョワの世紀の昼と夜の記録である。

霧月十八日のクーデタによって支配者の位地につくことになったナポレオン一世の贖罪とは、ロシア遠征の敗北でもなければ、ワテルローでもなく、セント・ヘレナの流刑でもなく、後継者としてルイ・ナポレオンをもったということであるというのがこの詩の諷刺的主題といわれるものである。だが諷刺という言葉を用いるにはこめられた感情があまりに重すぎはしないだろうか。

「贖罪」は七部からなり、それを三つに大分できる。はじめの三

部では帝国の運命を決したロシア遠征、ワートルローの戦、そしてセント・ヘレナにおける流刑と死。次の三部でナポレオンの復活とナポレオン伝説の形成が語られ、最後の第七部は墓の中のナポレオンの幻想として第二帝政の卑劣と滑稽が戴画的に描かれている。

叙事詩的というのは七〇万の大軍をひきいてロシア遠征にむかつたナポレオンがモスクワの火災とコサック・ゲリラ兵の襲撃をうけて雪の荒野をのがれる運命的なリズム、

Il neigeait. On était vaincu par sa conquête.
Pour la première fois l'aigle baissait la tête. ...

ではじまり

- Sortira-t-on jamais de ce funeste empire ?
Deux ennemis le czar, le nord. Le nord est pire.
のような詩句をふくむ第一部。あるいはワートルローの戦場の跡に立つての詠嘆、

Waterloo! Waterloo! Waterloo! morne plain!

ではじまる第二部のことである。雄大で壮重で悲愴な……と形容詞を並べてもほとんど説明にならないが、このリズムとこの一行の重さとはたしかにこれまでのボナパルチズムの詩にも見出せなかったものである。このような詩句を自己のものとするためには、民族

感情にたいする単なる共鳴や熱狂ではなく、民族感情にとらわれながらも、民族感情とそれにとらわれている自己とを客観的に眺めその意味を問う別の視点を必要としたはずである。ルイ・ナポレオンの出現がそれを与えてくれた。

L'empereur mort tomba sur l'empire détruit.

Napoléon alla s'endormir sous le saul.

Et les peuples alors, de l'un à l'autre pôle,

Oubliant le tyran, s'épripent du héros. (...)

A la colonne veuve on rendit sa statue.

Quand on levait les yeux, on le voyait debout

Au-dessus de Paris, serein, dominant tout,

Seul, le jour dans l'azur et la nuit dans les astres.

Panthéons, on grava son nom sur vos pilastres.

On ne se souvint plus que des jours éclatants ;

Cet homme étrange avait comme envivé l'histoire ;

La justice à l'œil froid disparut sous sa gloire.

On ne vit plus qu' Essling, Ulm, Arcole, Austerlitz ; ...

(死んだ皇帝は破壊された帝国の上に倒れた。ナポレオンは柳の下で眠りについた。そして諸国民は極端から極端にはしり、暴君を忘れ英雄に熱狂した。(……) ひとりきびしく立つ記念柱に彼の像がかえった。見あげればナポレオンの像がバリの空に静かにすべてを見おろして、ただひとり星は青空に、夜は星空に立っているのが見えた。バンテオンよ、かれの名はあなたの欄間柱に刻まれた。人はも

はや時の一面しか見なかった。人はもはや輝かしい日々しか思い出さなかった。この不思議な男は歴史を陶醉させたかのようにだった。冷い目をした裁きはかれの栄光の下で姿を消した。もはやエスリング、ウルム、アルコレ、オーステルリッツしか目にうつらなかった。

この第四部には、ナポレオンの死後に形成されたほとんど盲目的といえる熱狂的な民衆のボナパルチズムが描かれているが、同時にこの熱狂に身をゆだねて「記念柱によせるオード」をうたい「皇帝の帰還」をうたったユゴーのボナパルチスト詩人としての半生の思ひ出がなつかしさと悔恨をこめて語られている。「エコ・ソノール」として民衆の声に応じて心をこめて歌ったこれらの詩は、ルイ・ナポレオンという道化役者の登場をたすける序曲にすぎなかったのか？ユゴーは歴史と運命の怖しさを身をもって痛感したはずである。第七部……

.....
Napoleon le Grand, empereur ; tu renaiss

Bonaparte, écuyer du cirque Beuharnais. ...

.....

Toi, lion, tu les suiss, leur maitre, c'est le singe. ...

.....

Devant cette baraque, abject et vil bazar

Où Mandrin mal lavé se déguise en Cézar, .

Riant, l'affreux bandit, dans sa moustache épaisse,

Toi, spectre impérial, tu bats la grosse caisse! ...

(皇帝大ナポレオン。あなたはポアルネ競技場の曲馬師ボナバルトに生れかわったのだ。(……))

ライオンであるあなたが道化師たちのあとを追う。かれらの主人は猿だ。(……)

顔の汚れをよく洗いおとしていないおそろしい盗賊のマンドランが大きな口髭をつけてはえみシーザーのふりをしている卑しく汚ない市場、この仮小屋の前で、皇帝の亡霊が太太鼓をたたくのだ。(……)

ユゴーのナポレオン三世に対する怒りは、たんに大臣とかそれに匹敵するような社会的地位の期待を裏切られたということだけでは説明がつかない。深い内奥からのものであった。ルイ・ナポレオンの存在自体が今となつては、ユゴーの詩的世界に対する嘲笑であった。これは残酷な裏切りであり批判である。じつさいルイ・ナポレオンの登場にユゴーほど力をかけた人物はまれであった。ナポレオンの贖罪は実はユゴーの「贖罪」でもあった。

ユゴーは自己のボナパルチズムに反省を強いられた。ルイ・ナポレオンに裏切られたユゴーの最初の反応はおそらくルイをあしざまに罵れること、卑劣な道化として描きだすことであったろう。しかしこの道化はユゴーの崇高なナポレオンに似せて作られていることは否定できない事実である。そしてかくも見事な戯画・パロディを眼前につぎつけられてみれば、オリジナルに対する尊敬に変化がおこるは避けられない。実際ユゴーは共和主義を進め、たし、「十二月二日」によって「霧月十八日」を批判することになる。しかし自

己の半生を一挙に否定しすることはできない。ユゴーは政治的にボナパルチスムを捨てたにしても詩人としてはすてなかつた。むしろ帝国と皇帝のイメージが最も力強く鮮明に描きだされているのは『懲罰』においてであり「贖罪」においてである。おじの栄光とおじの卑劣がともに否定できない存在としてユゴーに迫ったとき、ユゴーの解決策は両者を客観的に見通す一つの高い視点、運命観あるいは歴史観を確立することであつた。「ナポレオン二世」の詩に見出された「宿命」は、今度はユゴー自身をもまきこんでより劇的な現実としてユゴーの前に展開したのである。ユゴーの前にひらけたのは一つの巨大な啓示的世界であつた。

ユゴーの亡命生活はボナパルチスムを客観化する視点を与えたが、同時にボナパルチスムを深く内面化することにもなつた。ユゴーが長い生涯に次々と通りぬけた様々な革命的事件もこの時ほど根本的な変化をユゴーの生活にも思想にもたらさなかつた。「贖罪」には相変らず「驚」であり「獅子」であり、「ハンニバル」であり「ザイ」であり、「プロメテウス」であり「巨人」であり「巨木」である「英雄」ナポレオンにつきまとう一種のうしろめたさと不安の感情が描きだされている。これは甥が伯父におとした影であるが、ボナパルチスムの内面化でもある。

じつさいジャージー島で亡命生活に耐えているユゴーは、セント・ヘレナのナポレオンに思ひをはせる資格をえたといふべきだろう。これまでもユゴーがボナパルチスムを表明するたびに、ユゴーが自分をナポレオンと同一視していることが非難され皮肉られてきた。また事あるたびにユゴーはナポレオンに比較されもした。バル

ザックが文筆のナポレオンを志したのは有名な話であるが、ユゴーの場合には気質や文体のうえでも類似があつた。ユゴーの「力」と力の一面でもある卑俗さにがまんのならなかつたサント・ブーヴは「ユゴーはいつも巨大である。ルメルシェの後任でアカデミーに入つたくせに、ナポレオンの後任の様な顔をしている。なにをいってもナポレオンの事ばかり話している。貴族院に入るとたちまち大西洋と用事ができるしまつた。あの偉大な破壊者と張り合うような態度である。」とも「二十年間、短詩だとかバックス讚美の詩だとか手をかえ品をかえナポレオンの事を歌い、叫び、吼えたとて、生れてた帝政に反抗しているウィクトル・ユゴー……」(「我が毒」)とも書いている。

崇高な悲劇とコミックというよりはグロテスクな道化芝居を並べる構成からは複雑微妙な詩的効果がうまれている。このコントラストは一世をより偉大に三世をより愚劣に見せる一方、前者に影を後者にある種の光をあたえる。つまり皇帝と道化役者がどこか深いところで結ばれているという感じを与える。正直な読者は、最初の雄大な歴史的記述の叙事詩から読みすすみ、ナポレオンの死後に民衆によつて形成された熱狂的なナポレオン崇拜の数々の描写をへて、やがて墓の下にナポレオンに示されるナポレオンの仮装をした道化連中のグロテスクな戯画にいたり、それが大文字の DIX-HUIT REBUTAINRE で突き刺すように終るとき、啓示された世界の光の強烈さに愕然として思わず目をおおうであらう。

ブリュヌチエールはユゴーの詩を三つの時期(抒情的、叙事的、默示的)に分けた。この小論では後期の默示的世界をとりあげる余

裕はないが、これらの特色は初期の抒情詩からすべて可能性としてひめられており、ユゴーの特色はこれらの諸要素の同時存在に求められるべきだろう。ユゴーに純粹な抒情詩が割合に少ないのは、ユゴーの壮大趣味がともすれば歴史や民族感情の方向にむかうからであり、純粹に叙事詩になりえないのは『英雄』に対する自己同一化が強すぎるからである。默示的世界についていえば初期の「見神」にすでにみられるような宇宙を支配する神秘存在についての感覚はあらゆる詩の根底にあったと考えられよう。

ユゴーが最初の熱狂的なボナパルチズムの詩「ヴァンドームの広場の記念柱によせるオード」を書いた年は「クロムウェル序文」の年でもあった。このなかでユゴーは美と醜、崇高とグロテスクの結合をロマン派の美学として宣言したのであった。『懲罰』の詩人は二六年前に書いた「美のかたわらに醜が優雅なるもののかたわらに畸形が、崇高なるものの裏にグロテスクが、善とともに悪が、光とともに影が存在する」という言葉の真の意味を発見したはずである。ユゴーは本質的にアンチ・テーゼの詩人なのだ。ユゴーはうたっている。

--commencer par Homère et finir par Callot
Épopée! épopée! oh! quel dernier chapitre!

(ホメロスで始ってカロで終る、叙事詩よ、叙事詩よ、ああなんという終章)

これが「贖罪」の内的な主題であり、ユゴーの詩的世界の視点はここに定められたのである。ユゴーは『レ・ミゼラブル』のなかで

「この書物は無限なものを主役とする一つのドラマである。人間はわき役なのだ。」と書いているが「贖罪」についても同じことがいえよう。『無限なもの』とは神を信ずるものにとつての摂理、唯物論者にとつての歴史法則であり、その前では雄大と卑少、崇高とグロテスクともに平等なのである。ふたたび『レ・ミゼラブル』からかりるなら「草の茎から茎へと移るあぶら虫も、ノートルダム寺院の鐘塔から鐘塔へとぶ驚もすべて平等なのである。」

四 共鳴の詩人

.....

L'œil même qui te fuit te retrouve partout.

Toujours dans nos tableaux tu jettes ta grande ombre :

Toujours Napoléon, éblouissant et sombre,

Sur le seuil du siècle est debout. ...

(あなたを見ないように目をそむけてもいたるところであなたを見つけてしまう。あなたは私たちの時代のあらゆる場面にあなたの大いなる影をなげかける。ナポレオンは世紀の入口に目をくらすほどに明るくそして暗く立っているのだ。)「彼」

ユゴーがこのように歌うのは、ナポレオン体験が国民的歴史的体験としてその時代に現実存在し、しかもそれが国民感情のなかにきわめて大きな部分を占めているからであるが、他方、ユゴーの詩的世界がそのような体験と感情を基盤にして成立していたからである。

ユゴーは自己をとりまく広い世界との調和の感覚にもとずいてうたいあげる型の詩人である。ユゴーは共鳴によってうたうのだ。そのことは、先に引用した

Napoléoni soleil dont je suis le Memnoni

という表現にも暗に示されているが、ユゴーはそれを「ユゴーはそれを『ユゴー』として確立した。」

Tout souffle, tout rayon, ou propice ou fatal,
Fait reluire et vibrer mon âme de cristal.

Mon âme aux mille voix, que le Dieu que j'adore
Mît au centre de tout comme un écho sonore.

(幸福をもたらすものであれ不幸をもたらすものであれ、あらゆる風とあらゆる光がわたしの水晶の魂を輝かせてうちふるわせる。私が深く愛する神が、鳴り響くこだまとして万物の中心に置いた千の声をもつ私の魂を。)(「今世紀は二才であった。」)

第一。この言葉の背後には詩人と「世界」との調和の感覚がある。第二に、ここにはユゴーの自我構造についての示唆がある。自己を「エコー・ソノール」と定義することは驚くべき傲慢であると同時に驚くべき謙遜ではないだろうか。万物の中心にあって千の声をもつ魂とは宇宙を代表する選ばれた詩人ということであり、また自己が単なるこだまであることに満足するというのはボードレール以後

の現代詩人には思いもよらないことであるからである。ここにあるのは疎外意識によって深化し孤絶する以前の自我である。第三に、この詩が、王権とナポレオンと自由に対する同時の愛、「父」と「母」に対する同時の忠誠の表明で終っていることからわかるように「エコー・ソノール」の語は「転向」についての弁明を用意している。この主題は後に『たそがれの歌』に収められた「ルイ・Bに捧ぐ」(一八三四年八月)でさらに展開されている。

La cloche! écho du ciel placé près de la terre!

(…)

Sur cette cloche, auguste et sévère surface,
Hélas! chaque passant avait laissé sa trace. ...

(鐘よ、地上の近くにおかれた天のこだまよ、(……)この鐘の尊くおごそかな表面に、道行く人は通りがかりにその跡を残していった。)

時代の刻印をきざまれつつ鳴り響く「鐘」のイメージはヴィクトル・ユゴーにふさわしい。ユゴーの政治的転向をユゴーの詩学から説明することもできる。ユゴーの政治的転向が詩的世界の変遷と密接な関係にあるのは、ユゴーが「世界」との調和の感覚に信頼をおき共鳴によってうたったからである。ユゴーの「世界」は最初は王党派の伝統(母親)によってとりまかれていたが、やがて帝国の記憶(父親)がよみがえってきた。そしてその間に国民という枠組をもった民衆の世界のイメージがだんだんと鮮明になってくる。ユゴ

「詩人の役割を民衆の予言者、啓蒙者、さらには民衆に行動をよびかけ勇気をあたえる煽動者」とすら考えるようになったことは『光と影』の冒頭におさめられた「詩人の役割」（一八三九年三月二五日（四月一日））や『懲罰』の「芸術と民衆」（一八五一年九月七日パリ）にもあきらかである。王党派から出発したユゴーは時代を逆にたどったのである。パリ・コミューンにいたってユゴーははじめて大革命を理解したといえよう。パリ・コミューンの後に『おそろべき年』と『九三年』があいついで書かれたことがそれを物語っている。

ユゴーが共鳴の詩人として時代と共に変っていったことは、もちろんユゴーが現実密着のオポチュニストであったことを意味しない。ユゴーは政治権力の動向についてきわめて敏感な詩人であり適応性に全く欠けていたわけではないが、時の政治権力との間には常になにかしら確執の種があり、詩人としては半世紀を支配し続けたユゴーも、政治家としては失敗の連続であった。この失敗をもたらししたのはかれの理想主義であり詩人としての使命感であった。ユゴーが単なる現実主義者でないことは先に引用した詩句の「神が万物の中心にエコ・ソノールとして置いた……」という表現や「地上近くにおかれた天のこだまである鐘」という言いかたにも示されている。

ユゴーが政治に執着した理由の一つとして、ユゴーにおける詩人の使命と政治家の使命の一致ということが考えられる。民衆の声を代表することと民衆の啓蒙という一見矛盾する二つの役割を同時に果たすのがデモクラシーの政治家の理想であるとすれば、それはまた

「エコ・ソノール」の詩学が要求する詩人の姿でもあった。代弁と啓蒙（教化）の矛盾を統一する視点としてロマン主義の時代は「民衆の声は神の声」という言葉をうみだした。これは逆に云えばこの民衆は現実のそれではなく、理想化された民衆であったということである。さらに政治家と詩人には時として予言者であることが要求される。「エコ・ソノール」の理論からそれを説明するには例えれば次のように云えばよいであろう。「ユゴーはその時代に合わせて調律されているので、まだ形に現われていない彼の時代の傾向を見抜く。」（「フランス詩の歩み」クセジュ文庫）

この意味（詩人と政治家の使命の一致）においてユゴーは本質的に政治的な詩人であった。ユゴーが詩の主題として政治をしばしばとりあげたこと、ユゴー自身が政治活動に参加したこと、ユゴーの詩が現実の政治に影響を与えたこと、ユゴーの雄弁……などは、ユゴーを政治的詩人と規定する場合の第二の要素である。

ユゴーの詩における政治家気取りにたいするサント・ブーヴやボードレール、あるいはジッドのいらだちは充分理解できる。だが彼らをいらだたせるものにこそユゴーの本質を認めるのも一つの方法であろう。現代的意義というのも、過去の作品に現代の通念をあてはめて、現代に通用する部分を過去から取り出してくることであれば、何ら生産的な意味をもちえないだろう。現代的意義とは過去を過去として歴史的に理解することによって、現代をうみだしたものと、現代から失われたものにたいする考察をふかめることではないだろうか。

その意味でユゴーをリユ・コマン（lieu commun）の詩人と観

定してみよう。月並み、常套句という意味のほかに、語源的に共通の場、共通の主題という意味をふくめてである。フロベールにあっては嘲笑の対象であったリュ・コマンも、ユゴーにあってはポエジの民衆的な要素として積極的な評価ができるのである。

月並み、常套句という意味でユゴーをリュ・コマンの詩人と呼ぶのは、言葉の魔術師に対する見当はずれの評語ととられるかもしれない。しかし月並みも最初は独創でありえたとし、優れた語句も人々に広くうたわれるようになればやがてすりきれて月並みになることはべつとしても、ユゴーには「常套句をうまく管絃樂化する」(ルネ・ラルー)能力があり、それは民衆詩人、あるいはデモクラシーの詩人としての名譽であった。月並みの詩化はたとえばナポレオン伝説を詩化する過程にきわめて明確にあらわれている。ユゴーのボナパルチズムの詩は、一篇の詩として全体としては優れているが、個々の表現(例えばナポレオンを形容する言葉)や描かれた情況はなにひとつユゴーの独創ではないといつてよいであろう。それらはすでに伝説の中で何らかの形で存在し語られていたものである。

日常的な表現を詩の言葉としてつくりなおすのはリュ・コマンの詩人の一面であるが、ユゴーは思想的にも自由・平等・博愛といったリュ・コマンを信じた詩人であった。

Je ne fais point fléchir les mots aux quels je crois ;
Raison, progrès, honneur, loyauté, devoirs, droits.

(私は私が信じている言葉の価値を下落させはしない。理性、進歩、名譽、誠実、義務、權利。……)(「一八七一年四月」△報復行

為をやめよう▽『おそるべき年』)

第二の意味におけるリュ・コマンの詩人というのは、すでにのべた国民感情の詩人、共鳴と調和の詩人、政治的詩人ということである。政治思想とは集団の思想であるから本来リュ・コマンの傾向をもっているのだ。そして広場の政治が雄弁を必要としたように、リュ・コマンの詩もある種の雄弁をそなえることになる。ユゴーの雄弁は集団の心を共鳴の詩人としてうたうところからくるのである。

ユゴーの詩におけるリュ・コマン(共通の場における共通の主題)とはまずなによりもナポレオンの名によって最もよく象徴される一国民の歴史的な共通体験でありそこから生れた国民感情であった。これまでボナパルチズムの名で呼んできたものがそれである。ボナパルチズムはナショナリズムの一種であるが、ナポレオンという統一の強力なイメージをもったナショナリズムである。それは「一七九二年このかた、ヨーロッパに起った革命はどれもフランス革命と一心同体なのである。自由の光のみなものはフランスなのである。これは太陽のようにあきらかな事実である。それが見えない者はめくらだ／＼そういつたのはボナパルトである。」(『レミゼラブル』)という形で展開したナショナリズムである。

ユゴーの詩におけるボナパルチズム。この視点は、ユゴーのような複雑で巨大な世界(じっさいそのつもりになれば功利主義の美学も芸術至上主義も、高踏派も象徴主義も超現実主義ですら取り出してこれるのだ／＼)を一望のもとに見下す地点などははじめから存在しないことを前提として選ばれたものであり、単なる一つの局面に

すぎない。しかし、政治的にも詩的にも王党派、ボナパルチスト、共和派と変転（ユゴーの言葉でいえば進歩）を重ねてきた詩人をとくにボナパルチズムの名で呼ぶことの理由はもう一度説明しておかねばならないだろう。ユゴーを王党派の詩人と呼ぶことは問題にならない、それは母親の支配下にあった子供のユゴーであったし、明確に見捨てられた世界だ。それに王家の没落は、ナポレオンの没落とはちがって「歴史に暗い感動をとどめるような壮厳な消滅の一つではなかった」『レ・ミゼラブル』第四部）のだから。では、なぜ共和主義のあるいは民衆の詩人と呼ばないのか？ 第一にユゴーの時代の民衆はすでにプロレタリアートの形をとりはじめていたにもかかわらず、ユゴーにはプロレタリアとしての民衆という認識が弱いこと。第二に、ユゴーは帝国とナポレオンの思出ほどには、民衆を形象化することができなかったこと。ユゴーはナポレオンに自己を同一化したほどには民衆の内面に入りこんでいけたとは思えない。むしろユゴーが民衆に接近しているのはボナパルチズムの側面からである。政治権力の面では、ボナパルチズムとはブルジョワジーとプロレタリアートの間の階級対立の平衡を利用して成立した独裁権力のことであるが、ユゴーの民衆にはブルジョワともプロレタリアともつかないところがあるのだ。政治思想についていえば、ユゴーはフランス革命の人権宣言の思想をそれほど越えてはいないように思われる。ユゴーは時代と共に歩んだが前衛的な思想家ではなかった。（同じ時代に生きたマルクスと比較すること）。

数百年あるいは千年をへて後世の人々が十九世紀文学を眺めるとき、私たちが中世にシャルルマーニュの伝説があり異教詩があっ

たことを認めるように、十九世紀のナポレオン伝説とナポレオンの叙事詩が一まとまりの形をとって目に映ることであろう。リュ・コマンの詩人ユゴーが記念碑や建築物をうたうことから出発したのは興味深い。ユゴーの詩がまさに広場に立つ記念碑であるからだ。ユゴーはボナパルチストとしてフランス最大の国民詩人となりえたのである。ルイ・ナポレオンを帝位につけたと同じ力がユゴーを国民詩人として形成したのは皮肉であるが、これが歴史の現実だ。こうしたフランス民族主義の構造をわすれて、ユゴーを偉大な国民的栄光に、ルイ・ナポレオンを愚鈍な浮浪人として描くことは一つの欺瞞といわねばならないだろう。人間と歴史を深くとらえた文学はひ弱な理想主義者がかならず目をおおいたくなる部分を含んでいるのである。（65・10・15・N・N）

*この小論は六年前に卒論に書きその一部を「フランシア四号」に発表した「スタンダールにおけるボナパルチズム」を念頭において書いたものです。